様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２０１０

研究課題名（和文）交代制勤務が困難な短時間勤務者の活用プログラムの開発

研究課題名（英文）Utilization program for part-time nurses raising children

研究代表者
川北　敬美（Kawakita, Toshimi）

大阪医科大学・看護学部・講師

研究者番号：５０４４０８９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　短時間勤務制度を利用して働く看護師（以下、時短看護師）の実態調査をした結果、病院機能によって、業務内容や超過勤務に差があった。急性期病院で働く看護師は、患者の状況によって変化する業務が多く、勤務時間を超過することもあり、時短制度が成立していない現状が見出された。
　先駆的に短時間勤務制度を導入し、モデル病院となっている一般急性期病院2施設の時短看護師、師長、看護部長より時短勤務における工夫や課題について調査を行った結果、時短看護師の仕事と家庭のバランスが取れる範囲というキャリアニーズをくみつつ、看護管理者は、彼らの強みを生かす業務内容や体制整備を行っていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　2009年の改正育児介護休業法で制度化された短時間勤務制度は、補助金など国の強力なインセンティブにより、またたくまに広がった。その結果、制度利用者が多数となり、フルタイム勤務者への負担増、夜勤者の確保など多くの問題が挙げられている。本研究により、それぞれのベッド機能に合わせた制度整備の必要性、短時間勤務者の強みを生かす看護管理者の工夫を明らかにすることができ、混沌としている短時間勤務制度に一定の示唆を与えることができた。

研究成果の概要（英文）：As result of participation observation survey, there were differences in work content and overtime depending on bed function. Acute-bed part-time nurses were performing complex tasks until the end of their shift, making it difficult to complete reports and handovers during shift.
As result of a qualitative inductive study with part-time nurses, nurse managers working at 2 hospitals with pioneering short-time regular employee systems reported in national councils and media. Career of part-time nurses was mainly focused on continuing their work. Nurse managers utilized the strengths and careers of part-time nurses.

研究分野：看護管理

キーワード：短時間勤務制度　看護師　看護管理者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2009 年に改正された改正育児・介護休業法により、育児に関する公的なサポートが充実し、妊娠・育児を理由とした退職は減少しつつある。しかしながら、夜勤や残業のできない看護師の増加によりフルタイム、夜勤ありの看護師へのしわ寄せ、長時間労働による疲弊が問題となっている。また、制度利用者においては、利用が長期にわたる場合、彼らのモチベーション低下や実践能力の維持が困難となっている。

本研究の目的は、実態に即したデータから組織全体として効果的な人員配置、職務配置のモデルを作成し、短時間勤務者の効果的な職務配分に関するプログラムの開発を行うことである。

文献検討および研究チーム、病院管理者からのヒアリングより、短時間勤務者の業務内容には、病床機能、看護体制や看護管理者の影響が大きいと考えられた。また、多くの病院において、短時間勤務者の配置や業務内容、他スタッフとの調整において、困難を感じておられる現状が明らかになった。そこで、2009 年以前より短時間勤務制度を導入し、国の審議会やメディア等で実績が報告されている先駆的な病院において、病床機能別で短時間勤務者の業務内容を把握するための参加観察調査を実施し（調査Ⅰ）、さらに、看護部責任者、部署責任者、短時間勤務看護師から業務内容および管理について、面接調査によるデータを得、短時間勤務者の効果的な職務配分のモデル例を考案することとした。

２．研究の目的

（１）調査Ⅰ

病床機能による短時間勤務者の業務内容の違いを明らかにする。

（２）調査Ⅱ

先駆的に短時間正職員制度を導入した病院において、短時間勤務制度で働く看護師（以降、時短看護師とする）のキャリアおよび、管理について明らかにする。

３．研究の方法

（１）調査Ⅰ

研究デザインは、タイムスタディによる看護行為量観測法である。調査対象は子育てを理由とする時短看護師で、急性期病床 2 名、慢性期病床 2 名である。すべての対象者は 5 年以上の経験を有している。データ収集項目は、日本看護協会の看護業務区分表の看護行為分類Ⅰ36 項目をベースに大場ら（2016）が作成した調査表 [1] を使用した。調査票は 5 分単位で記入する形式をとった。調査期間は 2017 年の 7～9 月である。データ分析は、Excel ver.2010 を用いた。石井ら（2004）の看護業務分類 [2] に従い、療養上の看護、診療支援看護、その他の看護に分類を行った。大阪医科大学倫理委員会の承認を得て実施した。

（２）調査Ⅱ

研究デザインは、半構成的面接法による質的記述的研究法である。調査対象は先駆的に短時間正職員制度を導入した 3 つの急性期病院に勤務する、時短看護師 2 名（計 4 名）、師長等部署責任者 2 名（計 4 名）、看護部責任者 3 名である。質問内容は、時短看護師へは「現在の仕事内容、仕事のやりがいや困難なこと、今後について」、看護管理者へは「時短看護師への配慮、看護管理上の工夫と支援」である。調査期間は、2017 年 8 月から 2019 年 5 月である。分析方法は、得られたデータを記述し、質的帰納的に分析した。大阪医科大学倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

（１）調査Ⅰ

いずれの看護師も 5 名程度の患者を担当していた。看護行為の内容は、急性期病床では、療養上の看護 19%、診療支援看護 52%、その他の看護 29%に対し、慢性期病床では、それぞれ 33%、29%、38%であった（図 1）。1 時間あたりの看護行為項目数（2 人の合計）は、急性期病床は 2～19 項目（平均 12.6）、慢性期病床は 2～14 項目（平均 9.7）であった。急性期病床では終業時間には業務が終わらず、2 人とも 20 分の延長を必要としたが、慢性期病床は 2 人とも終業時間に業務が終了した。

急性期病床は、慢性期病床に比べ、患者の状態に合わせ観察や必要な看護が変わり、医師や検査科など他部門と連絡調整を必要とするため、終業時間まで繁雑な看護業務を行っていた。そのため、勤務時間内の報告や業務の受け渡しが困難であると考えられた。短時間勤務者の活用プログラム作成において、病床機能別に検討する必要性が示唆された。

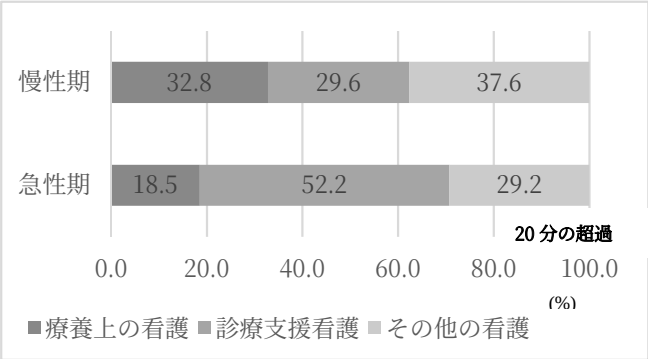

図１　病床機能からみた時短者の業務内容

（２)調査Ⅱ

①時短看護師について

時短看護師の経験年数は、9～15 年（平均 13.3 年）であった。時短看護師のキャリアは、［許容範囲の中での仕事］［終業時間への強いこだわり］［夜勤のない勤務を希望］［新たな仕事のやりがいを見出す］［看護実践力低下を実感］［家庭と仕事の間でのジレンマ］の６カテゴリーで構成された（表 1）

時短看護師が認識するキャリアは、仕事を継続することに主軸が置かれ、キャリアを発達させるという意識は少なかった。しかし、時短になったことで患者と丁寧なかかわりの時間が持てることに新たなやりがいを見出していた。看護管理者には、時短看護師の強みやキャリアを勤務時間内で生かすことへの工夫と人材育成プログラムの多様化が求められる。時短看護師には、働き方を柔軟に変えながら主体的にキャリアを発達させるという姿勢をもてるようなキャリア教育の必要性が示唆された。

表 1．時短看護師のキャリア

カテゴリー	サブカテゴリー
許容範囲の中での仕事	自分のやりがいより生活中心
	仕事自体は負担ではない
	相手をみて自分の仕事を任せたり残業したりする
終業時間への強いこだわり	終業時間になると帰る
	終業直前に仕事を依頼されると不満
	勤務時間内で終わるような業務の配慮
	給料より時間を取ることへの納得
夜勤のない勤務を希望	夜勤による体への負担がある
	夜勤による家族への負担がある
新たな仕事のやりがいを見出す	患者とのかかわりにやりがいを感じる
	仕事のやりがいを考えることはない
	フルタイムと時短のやりがいは違う
看護実践力低下を実感	普段はしないケアに緊張する
	全体を捉える感覚の鈍りを感じる
	仕事に必要な知識が遅れていると実感する
家庭と仕事の間でのジレンマ	家庭が優先だが仕事もしたいと感じる

②師長等部署責任者について

対象者が管理する部署は 7：1 の一般病棟で、管理する時短者は 1～5 名、勤務形態は日勤常勤短時間、あるいは月に数回の夜勤を含む短時間勤務であった。看護管理者は、時短者の＜意欲的な仕事への取組み＞姿勢を評価し、彼らの＜看護実践能力やスタッフからの信頼を活かす機会＞、＜スタッフの役割モデル＞など『時短者への期待』をしていた。そのために時短者だけを特別扱いにしないよう心掛けながら、＜超過勤務にならないよう配慮・心配り＞や＜働きがいややりがいを整える体制＞を作り、＜時短者の善さを活かす＞工夫をしていた。看護管理者は、能力や信頼が高いが一時的に短時間正職員制度を活用せざるを得ない看護師の能力とキャリアを期待し、それを最大限に活かす働き方への配慮とシステムの柔軟性を常に考え、他のスタッフとの協働した創造性のある組織づくりのための実践をしていた。

③看護部責任者

１病院の時短者は平均 18 名、勤務形態は日勤常勤短時間、月に数回の夜勤を含む短時間勤務であった。インタビューの結果、看護部長は、復帰前から働き方がイメージできるよう〈時短で働くための事前準備〉を行いながら、〈与えられた仕事を着実にする〉ことを求めて、〈院内教育への参加〉と〈キャリアの把握と支援〉、〈看護師長を巻き込（む）み〉〈時短者を活かす〉体制を整備し、【時短者を資源として活用】 していた。また、時短者だけを特別扱いしないように〈常勤スタッフへの配慮〉を心掛けながら、看護部長の考えを伝え〈理念の周知〉に取り組んでいた。さらに、時短者が働き続けられるように〈勤務終了時間の励行〉〈病院が希望する働き方を掲示〉するとともに、〈働き続けることへの強い意識づけ〉などを行い、【時短での働き方への支援】 をしていた。看護部責任者は、復帰前より、時短看護師の能力とキャリアを把握し、時短者を活かすことに看護師長と協働して取り組んでいた。日勤帯で継続して指導的役割を担ってもらうなど、時短者も貴重な人材であるというメッセージを伝えていた。そして、お互い様精神など〈常勤スタッフへの配慮〉を行いながら、多様なバックグランドを持つスタッフを受容できるような組織づくりを実践していることが推察された。

（引用文献）

[1] 大場薫，佐々木由紀，長能みゆき，他，タイムスタディによる看護業務量調査，東邦看護学会誌，13 巻，2016，15-22

[2] 石井豊恵，笠原聡子，沼崎穂高，他，タイムスタディによる結果の解析方法，看護研究，Vol.37，No.4，2004，47-58

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Toshimi Kawakita, Yoshiko Doi, Hifumi Aoyama, Kimiko Katsuyama, Makiko Muya, Fumiki Michishige	４．巻 8
２．論文標題 Comparing tasks of part-time nurses based on bed function : Fundamental research for construction practice programs of part-time nurses	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Nursing & Care	６．最初と最後の頁 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4172/2167-1168-C1-095	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川北敬美、青山ヒフミ、撫養真紀子、勝山貴美子
２．発表標題 短時間勤務で働く病棟看護師におけるキャリアニーズの検討
３．学会等名 第23回日本看護管理学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 勝山貴美子、川北敬美、撫養真紀子、青山ヒフミ
２．発表標題 看護管理者が認識する短時間正職員への期待と活用
３．学会等名 第23回日本看護管理学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 撫養真紀子、川北敬美、勝山貴美子、青山ヒフミ
２．発表標題 先駆的に制度を導入した病院の看護管理者が認識する短時間正職員への活用と支援
３．学会等名 第57回日本医療・病院管理学会学術総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	道重　文子 (Michishige Fumiko) (00274267)	大阪医科大学・看護学部・教授 (34401)	
研究分担者	勝山　貴美子 (Katsuyama Kimiko) (10324419)	横浜市立大学・医学部・教授 (22701)	
研究分担者	撫養　真紀子 (Muya Makiko) (60611423)	兵庫県立大学・看護学部・教授 (24506)	
研究分担者	原　明子 (Hara Akiko) (70585489)	大阪医科大学・看護学部・助教 (34401)	
研究分担者	青山　ヒフミ (Aoyama Hifumi) (80295740)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授 (34507)	
研究分担者	土肥　美子 (Doi Yoshiko) (10632747)	大阪医科大学・看護学部・准教授 (34401)	